三島市　（通巻　138号）

郷土資料館だより

Vol.47 No. 1
2024.7.15

企画展「新規収蔵品展」開催中！

●会　　期　令和６年６月29日（土）～９月29日（日）
●会　　場　郷土資料館　１階企画展示室

郷土資料館では、市民の皆さまからの寄贈や古書店等からの購入により、三島の歴史・文化・芸術に関わる資料の収集を行っています。

本企画展では、令和３～５年度の間に受贈・購入した資料として、画家細井繁誠の作品《南京》や、映画監督五所平之助の最後の作品である映画『わが街三島-1977年の証言-』の関連資料、令和２年度をもって閉園した西幼稚園の教育関係資料など、幅広い資料を紹介します。

●『日刊三島旭新聞』

今回の展示資料のひとつに『日刊三島旭新聞』があります。昭和５年（1930）６月20日から22日までの３日分をご寄贈いただきました（令和４年度、足立まり子氏）。

『日刊三島旭新聞』は三島町木町にあった三島旭新聞社で発行されていた地方新聞です。昭和４年に日向稜威夫によって創刊されました。昭和９年頃、同紙の経営は元東京日日新聞社の三島通信員である大杉孝太郎に移りましたが、その後数年で彼の死去により廃刊しました（注1）。

昭和５年時点では、１部４ページ、１ヶ月で50銭、１部売りは２銭でした。農繁期の託児所開設に関する論説や地域の奇怪な噂話、カフェの人気投票など地方新聞ならではの内容を盛り込んだ紙面構成です。さらに当時の人気作家・三上於菟吉（みかみおときち）（1891-1944）の小説『死を超る運命』が連載されています。

▲『日刊三島旭新聞』（昭和5年6月20日）題字部分

●昭和戦前期の地方新聞

大正後半期から昭和初期にかけて新聞の需要は増し、全国各地で都市、政党、思想、趣向ごとにさまざまな新聞が発行されました。三島では、昭和２年に日刊紙『伊豆日報』が発行されたことを皮切りに、『日刊三島旭新聞』のほか『日刊三島新聞』『日刊三島毎日新聞』『日刊水明』などの地方新聞が発行されました（注2）。全国でもっとも多く新聞が発行されていたのは昭和13年５月の13,428紙です（注3）。静岡県だけでも165紙（新聞紙法によって義務付けられた保証金を納付していない無保証新聞紙を除く）発行されています（注4）。

しかしこの時をピークに、新聞社は急激に減少します。元々戦争が激化していくにつれ厳しさの増す思想・言論への統制によるさまざまな不合理と闘っていた小規模な新聞社は、昭和13年に内務省によって開始された新聞統合によってさらに厳しい状況に追い詰められました（注5）。そして昭和15年12月、内閣情報局が設置されると「一県一紙」（各県の有力紙を原則として１紙に統合し、県当局の広報宣伝紙として活用するという統制）が進められることになり、三島で発行されていた新聞はすべて廃刊することになりました（注6）。なお、静岡県では静岡市の『静岡民友新聞』と『静岡新報』、浜松市の『浜松新聞』、沼津市の『沼津合同新聞』、清水市の『清水新聞』、熱海の『熱海毎日新聞』の６紙に絞られ、昭和16年12月にはその６紙が統合し『静岡新聞』が発行されました（注7）。この新聞統合によって多くの新聞が廃刊になった一方で、地方紙の基盤が確立され、今日のブロック紙、県紙の基礎がつくられることにもなりました。

注１：三島市誌編纂委員会『三島市誌』中巻（三島市、1985年復刻、1959年初版）、注２：前掲注１、
注３：里見脩「一万三四二八紙の新聞」（『言論統制というビジネス―新聞社史から消された「戦争」』、新潮社、2021年）、
注４：前掲注３、注５：前掲注１・３、
注６：新聞研究所『日本新聞年鑑』昭和16年版（1940年）、静岡県『静岡県史』通史編６（1997年）、注７：静岡県『静岡県史』通史編６（1997年）

郷土教室の報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。令和６年３月から令和６年６月までに行った事業をご紹介します。

日　程	郷土教室	内　　容	参加者
３月 ２日（土）	江戸時代の三島宿	くずし字スタンプでしおり作りと三島宿を中心とした展示ガイド	35人
５月 ５日（日祝）	子どもの日体験デー	折り紙でこいのぼりとかぶとを作る	100人
５月18日（土）	古代のくらし	勾玉作り・火おこし・本物の土器を使った土器あてクイズ	64人
６月 １日（土）	江戸時代の三島宿	江戸時代のペーパークラフト「立版古」作りと三島宿を中心とした展示ガイド	28人

５月５日　子どもの日体験デー

５月18日　古代のくらし（勾玉作り）

５月18日　古代のくらし（土器あてクイズ）

６月１日　江戸時代の三島宿

富士・沼津・三島３市博物館巡回展「石器とくらし―愛鷹・箱根西麓の旧石器文化とその周辺―」開催！

愛鷹・箱根西麓では、約38,000年前頃から人が住み始めていました。両山麓で確認される旧石器時代の遺跡からは、多数の石器（石の道具）のほか、陥（おと）し穴や石囲（いしがこ）いの炉（調理場）といった生活の痕（あと）が見つかっています。

本巡回展では、愛鷹・箱根西麓の旧石器時代の様子について、特に昭和54年（1979）に国の史跡に指定された休場（やすみば）遺跡に注目してご紹介します。

●会場・開催スケジュール

三島会場　会場：三島市郷土資料館１階企画展示室
会期：令和６年10月26日（土）～令和７年１月５日（日）
※沼津会場　明治史料館　６/29（土）～９/１（日）
富士会場　富士山かぐや姫ミュージアム　９/７（土）～10/20（日）

三島の歴史とジオポイント・30

―― 三島梅花藻（ばいかも）の里 ――

三島湧水の象徴「三島梅花藻」の白く可憐な花は、「三島梅花藻の里」（南本町７）でいつでも見ることができます。特に夏季は毎日満開です。

三島市街地の中心に位置する本町交差点を南に数分歩き、伊豆箱根鉄道の踏切を渡ると、御殿場泥流層（富士山起源の巨大土石流、約2900年前）を浸食した湧水河川・御殿川と四ノ宮川の低地が広がります。

同地域の地下には、小浜池付近で箱根山の山脚を乗り越えた三島溶岩流（約１万年前）の先端が分布しており、そこからの湧水が三島湧水群の南群を形成しています。

この湧水群は海抜高度が低いため、楽寿園周辺に分布する三島湧水群の北群とは異なり、一年中湧出しています。

満開の三島梅花藻

昭和20年代には、湧水を利用した養魚池がありましたが、その一部は、三島市域を南北に貫く県道51号（昭和33年開通）の敷地になりました。

県道から外れた部分は湧水池として残り、道路を挟んだ佐野美術館（隆泉苑）の和風庭園に現在でも清水を供給し続けています。

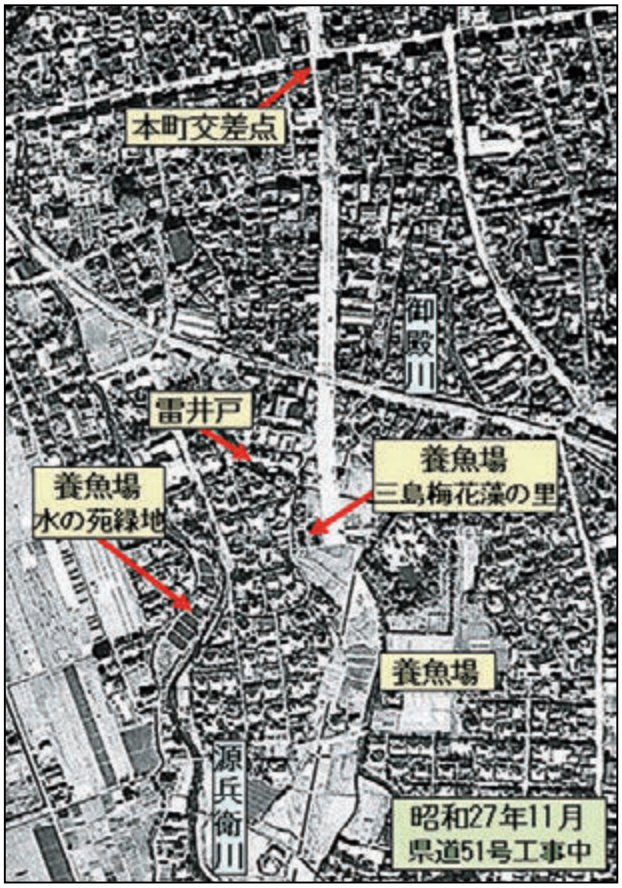
三島梅花藻は、昭和30年代前半までは三島湧水群の北群を水源とする諸河川に生育していましたが、30年代後半以降、上流部での過度な揚水により湧水が枯渇し、姿を消しました。

平成７年、市内のNPO法人が三島の象徴を復活するため、佐野美術館から湧水池を借り、柿田川に生育している三島梅花藻を移植し、小公園「三島梅花藻の里」を整備しました。

三島梅花藻は、水温・水質・日射量などに非常に敏感で、管理が大変です。一般河川や水槽では育ちません。

以来、30年間近く有志の方々が細心の注意を払い、大切に育てています。

増殖した三島梅花藻は、三島湧水群の北群が水源の源兵衛川や御殿川、桜川などに移植されています。



県道51号工事途中の空中写真
（米軍撮影、国土地理院提供の画像に加筆）

しかし、上流域にある企業からの給水を受けない桜川と御殿川では、晩秋から冬季、生育環境の悪化と、カモ類の食害で毎年壊滅してしまうため、移植を繰り返しています。

市内の川で三島梅花藻を見ることができるのは、「水と緑の三島」復活のために、日々努力を重ねている人達のおかげです。感謝します。

（郷土資料館運営協議会委員・増島淳）

三嶋大社の古文書をよむ　第21回

◆平安のみやびが描かれた屏風

今回は古文書から離れ、絵画資料を読み解きます。今年はドラマの影響もあり、書店に行くと平安時代を特集したコーナーを見かけますが、平安期の資料自体は、鎌倉時代以後のそれに比べるとずっと少なくなります。しかしながら、平安期の社会や風俗が後々まで影響を与えたことは言を俟ちません。写真の屏風（「大堰川遊宴之図屏風」）は江戸時代のものですが、描かれた内容は、平安の雅を伝えています。

大堰川遊宴之図屏風　法眼元陳筆　三嶋大社蔵

扇をかざし船を招く人物

法皇を描く

まずは屏風の見方から。屏風は組になる場合が多いのですが、この資料のように二枚一対の屏風は一双と数えます。対の屏風の片方だけを数える場合は隻といいますが、向かって右を右隻、左を左隻と称します。この屏風は一隻が六つに折れていますので六曲といいます。これを総じて呼ぶ場合、六曲一双の屏風となります。ちなみに対にならず一点で成立する屏風であれば六曲一隻の屏風です。さらに細かい名称ですが、折れ曲がった一つの面を扇といい、向かって右端を第一扇としています。絵の場所を示す際に、右隻の第三扇とか、左隻の第一扇といえば、その位置がわかるのです。

では一双の屏風の左右についてですが、作品を見て判断することになります。分かりやすいのは落款の位置で、外側に来るように並べると正しい位置となります。落款が無い、または欠損してる場合は、絵のつながりで見ます。それでもわからない場合は、時間の流れや物語の流れをみるしかありません。巻物と同じで向かって右から左へ流れている場合が多いので、そこで判断しますが、不明な場合ももちろんあります。

作者について見てみましょう。法眼元陳筆と書記されていますが、おそらく江戸時代の狩野派絵師、吉田元陳（享保13年〈1728〉～寛政７年〈1795〉）とみられます。京都の絵師で狩野派の一流鶴澤派に連なります。法眼の位を得るのは安永６年（1777）とされますので、この作品はその後のものです。

次に絵の内容です。屏風には自然や風俗を描写するものや、そこに物語性を持たせているものもあります。この絵は、右隻の五扇から左隻にかけて三艘の船が描かれていて、古くから知られる三船譚、三船の才（三舟の才）と称される説話によったものと推定できます。三船とは漢詩の船、和歌の船、管弦の船の三種で、この行事では、指名された貴族たちがそれぞれ得意な分野の船にわかれ芸能の技を披露します。

この三船譚は、平安時代後期の白河院のころに成立したとみられる歴史物語『大鏡』に載るお話しが最もよく知られます。『大鏡』では、時は円融院の御代、時の権力者である藤原道長が大堰川（桂川・葛野川）にて行った船遊びを記し、特に藤原公任の才を称えるお話しとしてまとめています。ただ、円融院の時代であれば、道長の父兼家が力をもつ時期ですし、他の説話集では、円融院の時、藤原道長の時（円融院期のすぐ後）、白河天皇もしくは白河院の時などと、時期がずれていたり、栄誉を得た人物も、藤原公任、源相方、源時中、源経信らの名があがっているなど、微妙に異なるお話しとして伝わります。

鎌倉期の説話集『十訓抄』には、藤原道長が催す宴で和歌の船に乗った藤原公任の話の他、白河院の宴の際に、遅参した源経信が、どの船でも良いと岸辺から呼び戻したのが管弦の船であり、併せて漢詩・和歌をも献じたというお話しを載せています。この屏風では扇をかざす人物に管弦の船が呼応する様子が描かれていますから、どうやら源経信の逸話を描いたもののようです。

ちなみに右隻の人々のなかに僧侶が被る帽子（もうす・ぼうし）姿の人物が描かれています。この人物はあえて顔が隠されていますので、法皇の姿を描いたものでしょう。経信の存命中で法皇となり、さらに宴遊会を行い得たのは、円融院と白河院ですが、円融院のころの経信は10歳を過ぎたばかり、白河院では最晩年の80歳過ぎ。つじつまの合わない点が出てきますが、細かな考証を行うのは野暮なのでしょう。こうした宴遊は、円融院期や白河天皇期に行ったことは確認できるようですので、断片的な史実に多少の創作が加わり後世に伝えられていたと考えられます。江戸時代にはこうした説話風の話を題材に、平安の雅な様を描くことも多かったようです。

（郷土資料館運営協議会委員・奥村徹也／三嶋大社宝物館 学芸員）

令和５年度　郷土資料館事業報告

●寄贈資料

展示名	実施期間	主な展示内容	入館者数
特別展「150年後の国宝候補」	４月29日（土祝）～７月５日（水）	東京国立博物館で開催された「150年後の国宝展―ワタシの宝物、ミライの宝物―」において特別賞を受賞した市内の沼田行雄氏の作品「日本各地で集めた煮干しのコレクション」を紹介した。	9,521人
「学校の美術品展 Part1」	７月１日（土）～10月１日（日）	市内に14校ある小学校のうち７校が所蔵する、郷土ゆかりの芸術家の作品を紹介した。	12,828人
「三島宿へようこそ」	10月28日（土）～２月18日（日）	三島宿のはじまりと繁栄、危機やその終焉までを扱い、近世を通じた三島宿の全体像を紹介した。	16,411人
	関連事業：講演会１回、展示解説４回		
パネル展「三島の村々―旧村の歴史―」	３月９日（土）～５月12日（日）	北上・錦田・中郷地区の字（あざ）（旧村）についてパネルで紹介した。	3,817人（3/9~3/11）

●その他の展示

三嶋暦師の館、西小学校郷土資料室、生涯学習センター日本文学資料館「茂吉をめぐる歌人たち」

●教室・講座・講演会

	講座名	開催日	人数	講座名	開催日	人数
郷土教室	こどもの日体験デー	5月　5日（金祝）	162人	昔のあそび	10月　7日（土）	47人
	古代のくらし	5月13日（土）	15人	楽寿園の自然	11月　4日（土）	82人
	江戸時代の三島宿	6月　3日（土）	38人	昔のくらし	11月　4日（土）	43人
	昔のあそび	7月　1日（土）	8人	鰹節削りを体験しませんか！	11月27日（月）	68人
	江戸時代の三島宿	8月　5日（土）	29人	ワラ細工	12月　2日（土）	13人
	機織り体験	8月　5日（土）	9人	リリアン編み	1月13日（土）	10人
	紙漉き体験	9月　2日（土）	89人	楽寿園の自然	2月　3日（土）	33人
	江戸時代の三島宿	10月　7日（土）	19人	江戸時代の三島宿	3月　2日（土）	35人
	郷土教室実施回数　16回、参加者　700人					

	講座名	開催日	人数	講師等
講演会	企画展関連講演会「宿場世界の個性と多様性―三島宿と神奈川宿の絵画資料の比較から―」	11月23日（木祝）	57人	井上攻氏（元横浜市歴史博物館副館長）
講座	史跡山中城ガイド	9/17、10/15、11/19、12/17、2/3、2/18	計45人	当館職員

文化財ボランティア活動

◆**石造物調査の会**　年間10回実施　延べ90人参加
毎月１回、中郷地区（継続）

◆**古文書整理の会**　年間20回実施（古文書整理11回、剥離作業９回）　延べ143人参加
毎月２回、的場贄川家文書（近代）の整理（継続）・仮目録の刊行、下張り文書の剥離作業（新規）。

◆**民具整理作業**　年間12回実施　延べ62人参加
毎月１回、未整理民具の整理（新規）

●団体見学

21件　965人（市内小学校13件、市外小学校１件、その他７件）

●資料の収集、保管状況

令和５年度末現在　収蔵資料総数　47,106点（民俗7,804点、歴史38,366点、美術894点、自然42点）
令和５年度新規受入資料　13件（内訳：寄贈10件、購入３件）

●地域資料の把握・調査

民間所在資料　個人宅２件　264点
学校所在資料　小学校２校　13点（美術資料）

●刊行物

「郷土資料館だより」135～137号
『三島宿へようこそ』（企画展図録）
『三島宿関係史料集』13（箱根石道の修繕等に関わる古文書24点を翻刻）
『的場贄川家文書仮目録』６

●令和５年度　開館日数314日　入館者数49,986人

パネル展「三島の村々―旧村の歴史―」報告

●開催期間　令和６年３月９日(土)～５月12日(日)
●展示資料数　135点　**●入場者数**　10,458人

平成27年度～令和５年度に『広報みしま』へ不定期で連載していた「地域の歴史」（旧題「三島の村名」）の完結をきっかけとして、北上（きたうえ）・錦田・中郷（なかざと）地区に展開していた村々にスポットをあて、村名の由来や歴史を紹介するパネル展を開催しました（一部町村・市村合併に関連する資料を展示）。

市内だけでなく市外・県外からも多くの方にご来場いただき、「地名の由来がおもしろかった」「大変興味深かった」等の好評の声をいただきました。

ボランティア活動紹介

郷土資料館では、文化財の整理・調査と、体験講座（郷土教室）の運営を、ボランティアさんと協働で進めています。ボランティアグループのうち、今回は館蔵の古文書を解読しているグループと、郷土教室の運営に携わるふたつのグループの活動についてご紹介します。

古文書読習会

●実 施 日　毎月４回（第１・第３木曜日／第２・第４土曜日）

古文書読習会は、郷土資料館の開館から間もない昭和48年(1973)に有志によって結成されて以来、約50年の歴史を誇ります。当館の所蔵する膨大な量の古文書を毎月４回、こつこつと解読しています。これまでに当館が発行した『三島宿本陣家史料集』『三島宿関係史料集』などの史料集の多くは、読習会のみなさんが解読した成果を冊子にまとめて刊行したものです。

現在は木曜部会と土曜部会にわかれて活動しており、それぞれ違う史料を解読しています。古文書に書かれた内容をメンバーで読み合わせていきますが、時には1文字の解釈をめぐって、くずし字辞典を片手に議論がかわされることもあります。

展示ガイドグループ

●実 施 日　郷土教室(毎月第１土曜日)のうち年に４回程度

郷土教室のうち「江戸時代の三島宿」を担当しています。３階「三島の歴史　体験学習室」で、三島宿を中心とした展示ガイドを行うほか、くずし字スタンプを使ったしおり作りや、浮世絵をモチーフとした江戸時代のペーパークラフト「立版古(たてばんこ)」作りなどをおこなっています。

当館は三島駅前の市立公園楽寿園内に立地することから、市民のみなさんだけでなく、観光の方も多く来館します。三島に初めて来る方の、「三島ってどんなところなんだろう？」という興味・関心に応えるべく、三島の歴史や文化をお伝えいただいています。解説によって展示内容をより深く理解していただく事ができ、来館者の方と話に花が咲くこともしばしばです。

「江戸時代の三島宿」立版古作り

「江戸時代の三島宿」くずし字スタンプ

楽寿園グループ

●実 施 日　郷土教室(毎月第１土曜日)のうち年に４回程度

郷土教室のうち「楽寿園の自然」「古代のくらし」等を担当しています。「楽寿園の自然」では楽寿園内で採集したどんぐりを使った工作や葉っぱの拓本を使うカード作りなどを行い、「古代のくらし」では火おこし体験・勾玉作り・本物の土器片を使った土器あてクイズを行っています。いずれも子どもに人気のイベントです。

当館は歴史系の資料を中心とする施設ですが、楽寿園内に立地していることから、園内の自然に興味のある方や、楽寿園に遊びに来た子どもたちも多数おとずれます。楽寿園グループのみなさんには、園内の自然環境やどんぐりの分布、三島溶岩流などに関する豊富な知識を活かして、幅広い来館者の興味・関心に応える活動を担ってくださっています。

「楽寿園の自然」園内ジオツアー

「古代のくらし」火おこし体験

寄贈資料の紹介

令和６年２月から６月までに、次の方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます。

●寄贈資料

寄 贈 者	資 料 名	点 数
田上眞知子 氏	古文書「御貸附金拝借証文質地帳」（文化11年正月）、掛軸（年貢割付状などの近世の古文書４枚を張り付けて１張の掛軸として仕立てたもの）	2点
杉 山 幹 昌 氏	棹秤（大森商店）、台秤	2点
商 工 観 光 課	ポスター（オリンピック関連・万博関連等）、色紙（大河ドラマ関連等）	9点
個人（三島市）	冊子『おらが町の無形文化財 小浜山物語り』・『郷土の昔を知ろう　その二　三島と頼朝政子』・『三四会会員名簿　別冊』	4点
高 田 定 芳 氏	新聞資料（北伊豆震災ほか）、雑誌『週刊朝日』、版本『北征日誌』・『太政官日誌』・『西遊日記』ほか、孤山堂凌頂関係資料	97点
個人（三島市）	図書『ふるさとのしおり　みしま』（昭和47年発行）	1点
芹 澤 邦 男 氏	稲刈り機、散布機、補虫機、飯籠 等	5点

●孤山堂凌頂関係資料　短冊２点・ハガキ１点

梅龍寺（梅名）の住職をつとめていた高田家より寄贈された資料で、幕末～明治時代の俳人である孤山堂凌頂（箕田寿平、天保11年〈1840〉～明治42年〈1909〉11月14日）の俳句をかきつけた短冊２点と、凌頂が高田有風（定禅）に宛てて出したハガキ１点です。

凌頂は、君沢郡八反畑村（現在の三島市八反畑）の渡辺家に生まれ、のちに分家して箕田姓を名のります。三島宿で漢学塾を開いていた福井雪水のもとで漢学を学んだ後、江戸へ出て江戸俳壇の重鎮といわれた孤山堂卓郎（三島宿出身）のもとで俳諧を学びました。安政６年（1859）頃に故郷へ戻り、師・卓郎の死後に「孤山堂」を継ぐこととなります。明治に入ると、俳諧結社・鳴鶴社を主宰し、俳諧雑誌『四季の花波』を発行、後続の指導にあたるなど、俳諧の振興に尽くしました。

短冊２点は、ともに明治41年に詠まれたものです。写真①は「戊申歳旦　元朝や　産れのまゝの　心もち」とあり、年が改まって気持ちを新たにした様子が詠まれています。写真②には「歳在　戊申一月　御歌所御題　はる空や　松□延喜の　宮はしら」とあって、この年の勅題「社頭松」を詠んだ句となっています。

ハガキ（写真③）は、明治42年６月19日に書かれたもので、この日付は凌頂が没する約５ヶ月前にあたります。凌頂の住所は「筑前国福岡市」となっているため、この時、福岡へ嫁いだ次女もしくは養女（長女の子）の宅（注1）に身を寄せていたものと推測されます（同年娘婿の勤める福岡医科大学附属病院へ入院の後、没（注２））。ハガキには、九州の俳壇の様子や高田氏より送られた句の添削等に加え、「現今、各国大家及俳友は勿論、名も聞かさる人々より日々三葉つゝ届き」とあり、福岡で過ごす凌頂のもとへ有名無名を問わず、日々さまざまな俳人たちから文が届いていたことが示されていて、最晩年の凌頂の暮らしぶりをうかがうことができます。

（注１）渡辺たかし「大梅居児島孤山と孤山堂三代（3）―三島・沼津におけるその門葉の人びと―」（『沼津史談』66号所収、2015年）、（注２）同前。

《令和６年度職員紹介》

館長　辻　真人　　職員　柿島綾子　岡崎義行　笹山曜子　保科桃子　　よろしくお願いします。

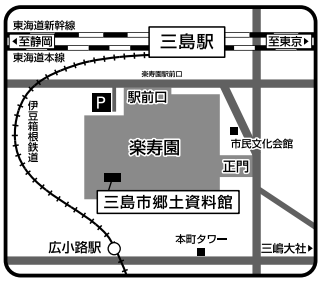
郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228　FAX 055-971-6045

開館時間　午前９時～午後５時（４月～10月）
　　午前９時～午後４時30分（11月～３月）

休 館 日　毎週月曜日（祝日のときは翌平日）、年末年始

入 館 料　無料（ただし楽寿園入園料として別途300円かかります。15歳未満は無料、学生は学生証提示にて無料。）



三島駅（南口）から徒歩5分

郷土資料館だより

Vol.47　No.1（第138号）
発行日　令和6年7月15日（年2回発行）
編　集　三島市郷土資料館
発　行　三島市教育委員会
E-mail：kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp
URL：https://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/